

長期臥床を余儀なくされた患者の看護

北5階病棟 発表者 早津 妙子

横山 ひろ子・根本 三代子・村山 登美子

はじめに

この患者さんが入院してきたとき、私達看護婦は「あっ」と驚かずにはいられなかった。下肢の極端な変形によるかわった歩き方、その生い立ち、暗い性格が、私たちに深い印象を与えた。そして「変形を矯正し人工関節で置換して普通に歩けるようにする」という医師の治療方針をきいたときは、ほんとうにこの患者さんにとってすばらしいことだと感じ、大きな期待をもって出発した。しかし、第1段階である右股関節の手術後、骨癒合の遅延のために、ギブス固定のまま長期臥床を余儀なくされ、また性格的に周囲にとけこめず、病室の片隅にとりのこされたかたちとなった。ある看護学生は、この患者さんを「医療の谷間にある」と表現した。何とかしなくては、という気持がこの症例研究の動機となった。

患者紹介 ○村○雄 50才男性 職業：工員

病名 右股・膝・足関節の強直

左変形性股関節症：軽度の左片麻痺

経過：8才の時右下腿の骨髓炎に罹患し、以来20才になる間に右上腕骨・胸骨・右大腿骨・下顎などに次々と発病し続け、疼痛のため骨盤を動かせなくなり一本杖で自宅近くの電気部品工場へ通っていた。不自由ながらも好きな釣りをしたり酒屋へ通ったりの生活を送っていた。昭和47年9月、45才の時、脳動脈硬化症のため軽度の左半身不随となり、48年7月まで奥鹿教湯温泉療養所にて療養し、長野県身障センターを経て、当整形外科へ入院となった。

患者背景：独身 両親はすでになく、妻に先立たれた兄とその子供の三人暮らし。他の兄弟四人は所帯をもって別居、家は農家で兄は会社員である。

趣味・嗜好：タバコ・酒・自動車にのせてもらって旅をすること、花の栽培・釣り。

学歴：小学校入学後まもなく発病したため、小学校は出ておらず、ひらがなと漢字の簡単なものを知るのみ。

その他：身障センター入所中、他の入所生の声で「殺してやる」という幻聴があり、脳動脈硬化症のものであるとの診断で精神安定剤内服、歯はむし歯で数本あるのみ。

入院時(S48年11月)より翌年7月までの経過

外転外旋位に強直した右股関節を骨切り術により良肢位とし、腰部～右足先までギブス固定した。患者は脳動脈硬化の後遺症と精神安定剤のためかと思われるが、いつも眠っているような状態でベッド周囲は汚れ、時々便尿の失敗があった。看護婦や同室患者と全く会話をもたず、看護婦はつい、命令的威圧的な調子で接してしまっただが、効果はなかった。

その頃の会話

○村：ブザー

Nurse：「何ですか」

○村：無言

N.：（部屋に行ってみる）「ブザーを押したのは○村さんですか」

○村：無言

N.：「誰か他の人押ししました？」

同室者：「○村さんです」

N.：「○村さん、何ですか、はっきり言って下さいね」

○村：（無言で下の方を指さす、便のこたらしい、すでにT字帯の中にしてある）

骨癒合が悪かったため、手術後半年たってやっと運動浴が始まった。リーダー格の同室者が転室して部屋の雰囲気もかわり、散歩や毎日の機能訓練をとおしてはたらきかけた結果、少し明るさを増し、話もするようになった。便尿の失敗もなくなった。

S49年7月より現在（S50年1月）までの経過

	外的条件	患者の状態	看護婦の働きかけ	評価
夏	<ul style="list-style-type: none">骨癒合の見通し立たず再手術前回骨切り部へ骨移植骨癒合促進のため大腿骨中間部骨切り理学療法師による機能訓練開始	<ul style="list-style-type: none">手術内容を理解せずその重大性に気づかないのか以前よりよく話す人に言われないと積極的に運動しない同室者と将棋を楽しむようになる	<p>長期にわたる入院生活をせいっぱい援助するため看護計画をたて働きかける</p> <p>例・頻ばんな消拭</p> <ul style="list-style-type: none">散歩に連れ出して会話をもつ歌声に参加させる床上リハビリをとおし社会復帰を諦めぬように働きかける <p>注 看護計画は別項参照</p>	<ul style="list-style-type: none">散歩に出ると生いたちを積極的に話すようになる「はやくよくなって飲みに行きてえ、俺の仕事は特殊だですぐ雇ってもらえる」と社会復帰への願望は強いが、「骨さえつきゃすぐ歩ける」と床上リハビリに熱意を示さない
秋	<ul style="list-style-type: none">同室の知的レベルの高い患者の退院季節的に寒くなり散歩にあまり出なくなる義歯作製のために抜歯が始まる	<ul style="list-style-type: none">突然 状態となり看護婦のあげ足をとる悪い冗談をいう例 「肩のひもがすれている」など性的な言葉が口に出る抜歯時、作為的に体温計をあげる。「こんなものは都合の悪いときは、こすって上げりゃあいい」	<ul style="list-style-type: none">カンフマレンズをもち、要求をさぐりながら自然にうけながす作為的発熱に対しては再検するとともに義歯の必要性を理解するようはたらきかける。義歯の費用は払い戻されることを説明	<p>患者の突然の変化にスタッフ一同驚いたが、知的レベルの高かった向いのベッドの患者が退院して心理的抑圧がとれたためか、あるいは散歩の回数が減って以前のように親密な看護婦との接触がなくなったためと思われる。自然にうけながすうち状態もおちついてきた</p>

外的条件	患者の状態	看護婦の働きかけ	評価
冬 12/XI ギブス切割 X-P撮影 義歯の完成	<ul style="list-style-type: none"> 大腿骨中間部の骨切りをはじめて知りショックをうける。医師への不信をぶつけてくる 転院の話が出て不安は頂点に達する 注Ⅱ参照 ↓ 元気がなく食事摂取量低下 無気力・不眠 クリスマスの夜、舌がまわらぬほど酔う ↓ 正月頃からおちつき同室者とトランプ・花札を楽しむ 看護婦に頼まれたガーゼたたみも行ない今までに全く素直に対応する 義歯をつけて食事する 花の手入れをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 骨のことは医師より説明してもらい納得させる スタッフは患者に禁酒をいわたし酒にかわる何かがないかを話し合い患者と共に考える 不眠に対しては薬にたよらず作業療法(ガーゼたたみ)を行わせる 	<p>転院の話が一時立ち消えて患者も少しおちつき、看護婦のすすめたガーゼたたみを「はじめてだもんでうまくいかねえ」といいながら熱心にやっている。話所の枯れかけたしくらめんをもっていつて手入れしたり「酒がなきゃねえ」といいながら紅茶をのんでもよく休んでいる。</p>

まとめ

この患者さんの場合、本来の治療目的はまだ達せられておらず、今後も相当な時間を要するだろう。1月末のレントゲンでは骨癒合が大部すすみ、次の段階へうつる希望も出てきている。患者自身は以前に較べ性格的に明るさを増し、また「将来をみすえて努力する」状態ではないが、上肢筋力・左下肢可動域ともずっと改善され、手先のことも少しずつはじめている。最近義歯が完成し文句を言いながらも根気よく練習している。スタッフも、ことあるごとにカンファレンスをもって、一致した方針で機敏に対処することがなかなかできなかった。今後、この研究を契機に、皆で話し合っ、看護者全員が一致して働きかけることを学んで行きたいと思う。

(注I) 看護目標と看護計画

看護の最終目標：身体障害の現実を受容しながら残された機能を最大限発揮して意欲をもって社会復帰できるよう援助する。

現在の看護目標：患部の固定を保ちながら、長期臥床からくる心身の退行現象を改善していく。

看護上の問題点

- ① ギブス固定が長期にわたり、現在なお骨癒合の見通しがたらず、希望のない単調な毎日を送っている。
- ② 入院前より多関節の強直、拘縮および筋力低下があるにもかかわらず、床上リハビリに積極性を示さず状態は悪化している。

- ③ 歯がほとんどなく食物の好き嫌いもはげしいため栄養状態悪く、骨癒合遅延の一因となっている。
- ④ 腰部～右足先ギプス固定のため動けず、不潔になりやすい。
- ⑤ 不眠の訴えがひんばんである。
- ⑥ 家族の面会少なく友人もいない。
- ⑦ 文字はひらがなと簡単な漢字しか読めず、これといった手先の趣味もない。

具 体 策

①, ②, ⑤について

- i ベッドサイドでのコミュニケーションを豊富にし、日常会話をこころがけ社会に目をむける。
- ii 根気よくはたらきかけ、毎日規則正しい床上での関節可動域訓練・筋力増強訓練が行えるようにする。
- iii 散歩に連れ出し気分転換をはかる。
- iv 同室者の励ましを得る。

③について

- i 義歯作製
- ii 食事内容の検討

④について

- i ベッド払いをていねいに行なう。
- ii 上肢股間の清拭を自分でさせる。
- iii 週2回の清拭・更衣

⑥, ⑦について

- i 家族の面会の定期化
- ii 他のKrankeとのコミュニケーションを活発化し、友人をつくる。

(注II)

再手術の内容を知ってショックをうけたあと、患者への相談がないまま総廻診で「義歯ができたらセンターへ送って次の手術ができるまで経過をみたい」ときかされた直後、ある看護婦を呼んで話したものを。

Nurse : 「〇村さん、私に用があるんだって」

〇村 : 「うん、ちょっと話してえことがあるんだ」

N. : 「なあに」

〇村 : 「こんな体でも先生の研究の材料になるかや、おれのようなこんな体でもあと使えるかと思ってるね。よけりゃ使ってもらったかと思ってるだ」(医学部への献体のことらしい)

N. : 「そう、そんなこと考えるなんて、〇村さんえらいねえ。私たちでもそんなことなかなかできないのね。」

○村：「つくづくいやになっただ。」

N.：「そうね、○村さんの気持わかるけど、私たちはもう一度昔のように○村さんに仕事を
してほしいと思っているのよ。○村さんもがんばってほしいなあ」

○村：「生きているかいないんだ。死なっと思えば簡単だよ。ちょっとひねれば死ねる。」

N.：「センターへいくのかいやなの？」

○村：「うん、どこへ行っても同じだで、もう治らんで……」